

女は復讐のために「春の童話」という小説を書いて公表し
男を社会的に葬ることに成功した――

一九八二年二月、発表と同時に発売禁止となった本書は

第一作「ある冬の童話」につづいて

中国社会に深刻な衝撃をあたらえた

「墮落した女」という烙印を押され、亡命して西独に在る作者が

かつて世に問うたこの作品は

文化大革命後の流動する中国の状況を鮮烈に刻印し

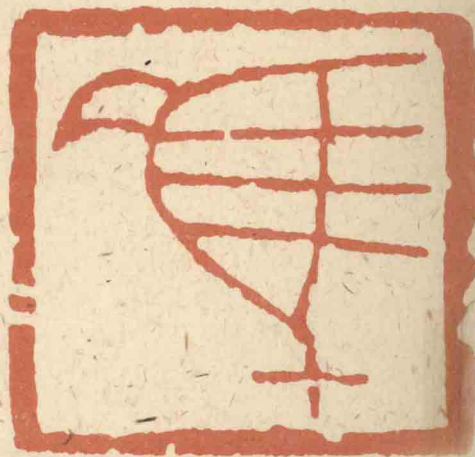
小説と現実の展開がみごとに照応している

「隠私文学」でもあった

春の童話

解説 竹内実／押川雄孝・宮田和子訳

遇羅錦作品集Ⅱ



春の童話

定価2200円

1987年2月25日 第1刷発行

著者 遇羅錦

訳者 押川雄孝／宮田和子

発行者 入江多喜雄

発行所 株式会社 田畑書店

〒107 東京都港区赤坂4-8-19 赤坂表町ビル301号

電話代表 03-403-5819／FAX・03-408-1571

振替東京5-103763

印刷・(株)工友会印刷所／製本・山本製本所

©1987

0097-300201-4429

春の童話

—— 遇羅錦作品集Ⅱ

押川雄孝・宮田和子訳

春の童話——目次

春の童話 5

第一章 7

第二章 45

第三章 145

第四章 233

訳註 344

訳者あとがき 押川雄孝 353

解説——「春の童話」とその作者 竹内実 361

凡例

— ルビは、人名・地名などの固有名詞の場合はカタカナで、その他の場合はひらがなで、それぞれの章の初出時に付した。ただし、著名な人名・地名などの場合は省いた。

— 新聞・雑誌・書名などは『』で、論文名・標題などは「」で表記した。

春の童話

宮田 押川
和子 雄孝
訳

第一章

一

わたしたちは握手をかわした。

思ったよりも、ずっと風采の堂々としたひとだ。がっしりとした体つき、いきいきとした眼差し、秀でた広い額。実直で、包容力と知的なものを感じさせる。服装はいたって質素、物腰は静かで自然だった。いまから思うと、堂々とした風采といったときにだれしもが思い浮かべるイメージとは、どこをとってもちがっていたのだが、好ましい印象をわたしに植えつけたようだ。もしかすると、痩せ細った年寄りの姿を思い浮かべ、よもやこんなに恰幅のいい人間だとは思ってもいなかったの、そのぶん、ぐっと好感がまったのかもしれない。

かれは温かいふくらんだ大きな手で、きつくも弱くもなく、やんわりとわたしの手を握った。のべつたくさんの手を握っているの、握手には慣れっこになっているとでもいうように。じっとわた

しを見つめてから、そっと視線をそらすようにした。もしや、このひとは世故に長けたひとではないのか、ふっとそんな突飛な考えが浮かんた。禿あがつてつやつやした額の奥には、きっと処世の知恵がいっぱい詰まっているにちがいない。

「さあ、この部屋で話をしよう」

かれはノブを回してドアを開けた。がらんとしているが、しつらいのりっぱな会議室だ。わたしたちは小机をはさんでソファ―に腰を下ろした。かれは南方とも北方ともつかぬ訛りのあることばで言った。

『過去の物語』⁽¹⁾は読ませてもらったよ。一、三、わたしの感想を話すことにしよう」

「メモを取ってもかまいませんか」わたしはおずおずとたずねた。

「かまわんよ。書くものは持っているのかね」

高くも低くもない抑揚のきいたソフトな声には、いかめしいようでいて、気さくさとやさしさがこもっており、わたしはくつろぎと親しみを覚えた。これは自分の処女作なのだ。いまひとから批評されようとしている。それも尊敬しているひとの口から。そら恐ろしくもあり、また半面、胸が高鳴るのを覚えた。なんと言われるだろうか？ わたしは身を固くして、そっと相手の顔をうかがった。

「万年筆だけで、紙がありません」

「じゃあ紙をとってこよう」と言って、かれは立ちあがった。体を起こすとき心もち大儀そうに見えた。ドアを開けると、かれは自分の執務室のほうへ行ったようだ。

が、いくらかも待たずに、ノート判の白い紙を二枚もって戻り、わたしに渡すと、もとのところに

坐って、視線を前へ向けたまま、よどみなく話しはじめた。

「まず、『過去の物語』は読み手に一気に読ませるものがある。わたしも、その日のうちにもう一度読み返したよ。きみは書ける人だし、モノを書く素質を持っている。前になにか書いたことは？」

「いえ、ああ……ただ小学校四年のとき、ある本に作文が載ったことはあります」
噴きだしそうになって、かれはぐっとこらえた。

「それは書いたうちに入るかな」

微笑が浮かんだ。まるで幼い、無邪気な子どもを相手にしているような感じだ。

わたしはちょっと気恥ずかしかったが、——それも心の内だけで良かった。もともとハニカミ屋なんかではないし、三十二のこの歳になるまで顔を赤らめた記憶もついぞない。物語にはよく「その少女は恥ずかしげにうつむいた」と決まり文句のように出てくるが、そういうところにぶつかると「反発すら覚える」。

「ところによつてはもう少し文章をはしょったほうがいい」とかれは言った。「でないと、くどくなる。たとえばきみの兄さん⁽²⁾の書いた論文なんかもエッセンスだけでいい。長々と小説に盛りこむのはどんなものか。労働改造農場の風景描写も冗長すぎる、これもさっとなぞるだけでいい。ああいった時代環境の中で、極左分子に『わたし』の一家がめっちゃくちゃにされてしまい、『わたし』が大自然に心の拠りどころを求めるといふのはむしろ理解できるのだが」

なにか温かいものが心をひたしていく。いまだかつて、このようにわたしのことをわかってくれ、励ましのことばをかけてくれたひとはいない。中等専門学校の北京工芸美術学校を卒業したときのわ

たしは十九歳。学んだのは畑ちがい、文学を志すわたしを励ましてくるような人間なんかいなかった。就職してまもなく、ノートに書きつけた反動的でもなんでもないことばのおかげで、わたしは紅衛兵によって公安局へしょっぱかれ、「思想反動」の烙印を押されて労働教護三年を言い渡された。励ましてくれるひとはなおさらいなくなった。そのあとは農村にやられ、結婚し、離縁し、また結婚し……で、かつて向学心の人一倍強かった学生も、ぼんくらで、がさつで、鈍感な農民、家庭の主婦、失職者になり果て、激励してくれるひとどころか、心の片隅にかりうじて残っていた文学への志も跡形もなく消え失せようとしていた。そこへかれ——この何浄先生が、わたしを初めて激励してくれたのだ。心がぬくもり、感激を覚えずにいられるだろうか。

「ただ男主人公だけは書込みが弱いな」とかれはまた語をついだ。『わたし』があの粗暴な夫を愛せないというのはわかるし、あとでほかの男に心惹かれるのも自然だろう。だが、その男のどこに惹かれたのが他人には伝わらない」

「でもわたしは……そのときはあのひとが好きになってしまったのです。気持ちのやさしいひとなんです」

口にした瞬間、すぐ悔やんだ。半分うつむいて万年筆を握っているわたしにも、なるほどというようにかれがかすかに笑う気配が感じられた。このひとはわたしがつい「問わず語り」に漏らしてしまったのを嗤っているのだわ、きっと。わたしは顔も上げられず、ぎゅっと万年筆を握りしめた。掌にうっすらと汗が滲んだ。

しかしかれはなにも気づかないように、父親のような寛容さで、さりげなく続けた。

「たぶん、小説の中の『わたし』がそのひとを愛するようになったのも、ただ精神的な安らぎが欲しかったのだろう——受けた苦しみがあまりに多かったから。しかし、それにはことのいきさつやら、そのおりのいろんな考え方をきちんと説明しておかなければいけない。でないとい読み手には理解しづらいし、説得力がない」

「精神的な安らぎ」？——わたしは内心どきんとした。わたしの行為と過去を、こんなことばで言われたことは一度もない。『過去の物語』はわたし羽姍ヒョウシヤン一家の実名を使って書いた小説で、一応小説ということにしてあるが、時、場所、情況、会話、心理などなにひとつ事実にもとづかないものはない。年長者に自分の愛情の本質をずばりと衝かれ、ハッと息を呑む思いがした。このひとには当人のわたしよりもわたしのことがわかるのだろうか。あのつやつやした広い額にはやっぱり知恵がいっぱい詰まっているのだ。わたしが口をすべらしたあとも、「小説の中の『わたし』が」と言い直してくれた心遣いがうれしかった。

「兄さんはいくつ年上だった？」

「四つです」

「たいした人物だよ」かれは吐息をついた。「きみのご両親がうちの新聞社あてに送ってきた訴えの手紙をもとに、われわれは四人の編集者を中級人民裁判所へやって兄さんに関する保存調書を調べさせたのだが、全部で六十四冊もあった。四人が三日がかりでだいたい眼を通し、ほぼ無実にながいないと断定して、裁判所側にわれわれの考えを伝えた。いや、そうそうはいないりっぱな人物だ」

そう話すかれの表情はいかにもうち沈んだ暗い感じで、二十七の若さで銃殺された兄を心から悼み、

憤っているようだった。

「あなたが理論会議の席で話されたことは、みな読みました。兄のために訴えてくださって、とても感謝しています」

「きみはあの会議に出ていたのか」

「まさか。職もない主婦のわたしなんか出られるわけがありません。友だちが教えてくれて、内容を見せってくれたのです」

「戸籍はまだ東北のほうに？」

「いえ。去年の冬、『病退』の手続きをしてこっちに戻ってきました」

「ほう」

「まったくのまぐれで運がよかったです。あらかじめわたしの身上書が紛失しているのがわからなかったら、たとえ病気だって、知識青年だと偽って病氣退職の手続きなんかとる勇氣は出ません」

「きみの問題もいずれ解決されるはずだ。文化大革命中に処理された思想犯は全部再審になる」

「ほんとうですか」わたしは思わず眼をみはり、まじまじとかれを見つめた。信じられない気持ちだ。小学校五年の一九五七年に、父と母が右派分子にされてから、一家に安穩の日は一日とてなかった。この二十二年ものあいだ焼きついた烙印が、かれの一言でおいそれと消えるものではない。

「最近の中央の文書に書かれていることだ。きみだけの胸にしまっておけばいい。他言は無用だよ」

なんていいひとなんだろう。こんな大事なことを初対面のわたしを信頼して打ち明けてくれるなん

て。わたしはまた感激した。かれはもう一度はうっと吐息をついた。

「まったく、文化大革命でどれだけ貴重な人材を死なせてしまったことか。けれど、きみの作品の中で充分に書けていないのは、まさにこの時代背景なのだよ。小説中の『わたし』がなぜ不本意な結婚をしなければならなかったのか。その不本意なところの書込みが足りない。きみは実生活を体験しているから、その気になればもっと書けるはずだ。わたしには書けん。生活がないから」

「新聞社の生活だって生活じゃありませんか」

「いや、こんな生活なんか——まあ、話はこのへんにして、少し原稿用紙をあげておこう」
立ちあがったかれは、机の上にきちんと重ねておかれてあるわたしの原稿の束を指さした。

「これじゃ五目炒めみたいだ。いくらなんでもみっともない。原稿用紙が足りなくなったらまた取りにくるといい」

「これは燈籠の下絵をかけた残り紙なんです。赤あり、ピンクあり、青あり、緑ありで、とてもイカスでしょ。ちょっと虹みたいで」

「なにが虹みたいだ」かれは苦笑した。「しっかり書くんだな。出来がよければ『時報』で連載するようにしてあげよう」

新聞に連載？　すごい！　そんなことは夢に見たことさえなかった。聞いたとたんわたしは有頂天になり、眼の前のかれが十倍も大きくなって映った。かれは右手を差し出してわたしの手を握った。わたしの心は感激でうちふるえた。

世の中はほんとうに変わったのだろうか。社会の底辺にいるわたしみたいな者が、ほんとうに頭をもたげることができるようになるのだろうか。別れ際にかれが言った「新聞に連載」ということばを、わたしは何度も何度もつぶやいては噛みしめた。喜び、励まし、力が四方八方からわたしを抱きしめ、頭のとっぺんから爪先まで、髪の毛一本一本にいたるまで幸福と興奮に包みこまれた。新聞社の正門から出てくるとき、何度も振り返って黄土色の七階建てのビルを見上げずにはいられなかった。

それは四月十六日の月曜日（注：一九七九年）で、ぼかぼかとしたいい陽気だった。太陽は情熱を秘めた金色の大きな手を差し伸べ、桃や梨の花の蕾をやさしく愛でている。笑いさざめきながら咲き競う花には生命力がみなぎり、枝垂れ柳には新緑が芽吹いている。樹の幹の中でチロチロとかすかな音をたてて流れる樹液の音が聞こえ、何千何万という蕾がほころぶのを促しているのが臉に映るようだ。白鳥の羽、砂漠の風紋、魚の鱗と、つぎつぎに白雲は装いを換える。なにもかもが蘇り、息づいている。道行く人たちの足取り、走り抜ける自動車、大きな広告の立て看板まで、みな息を吹きかえし、生まれ変わろうとしている。万物に突如新たな生命が宿ったようだ。わたしの心にも、野か林か、澄みきった青空のように、緑の炎——春の炎、ファイトの炎が燃えあがるかと思うと、ひんやりと心地のいいせせらぎが心をひたしていく……あれはなんだろう。そうだ、去年の理論会議でのかれの発言だ……

……土間から屋根まで倉庫いっぱい麻袋が積みあげられており、その一つひとつが死刑に処せられた政治犯の調書なのだ。われわれはそこから羽凌テイレイソウのものさをさがしだした。麻袋には厚ぼったい六十四冊もの調書が詰まっていた。かれらにはありとあらゆる手口を用いてこのわずか二十五歳の若者を痛めつけた。尋問は一か月に七、八十回にのぼり、事実の裏付けのない偽証をもとに自白を強いるやり口だった。そればかりか、後ろ手に手錠をかけ、重い枷をつけ、監禁し、ほかの囚人に殴らせ……たてつづけに四十日も街を引き回し、暴虐の限りを尽くした。羽凌はどうだったか。かれは屈せず、自白を拒み、頑として罪を認めなかった。まちがってはいないからだ。論文で姚文元一味を攻撃しただけで、学生たちの出している小新聞で血統論(9)（出身論）の反動性をあばき、日記の中で個人崇拜に反対しただけだ。なにが悪いというのか。自分が誤っていたと認めさえすれば生きのびられることは百も承知していた。だが、かれは誇りを失わなかった。では、かれの書いた日記の数節をここで読みあげよう。

……

諸君、これを聞いてどう思うか。十年も前に、この若者は個人崇拜の危険性をいち早く指摘しているのだ。かれは黨員でも団員でもない。両親が右派であるために、学業優秀であるにもかかわらず、大学にも入れなかった。かれは一介の労働者にすぎない。だが、かれこそはわれわれの時代の思想解放の先駆者なのである。十年前に羽凌が批判し、指摘した問題に、ここにいるわれわれの一人ひとりが深く思いをいたすべきではないだろうか。同志諸君、封建的迷信に千年以